

会議録（揭示用）

件名	令和3年度第3回子どもの未来応援条例（仮称）の制定に関する検討委員会	作成課	こども未来局 こども福祉課
日時	令和4年1月17日（月） 10時00分～12時00分		
場所	教育総合センター4階会議室		
出席者	子どもの未来応援条例（仮称）の制定に関する検討委員会委員8人（2人欠席） オブザーバー（子どもの未来応援ワークショップ受託業者）		
市出席者	こども福祉課長		
会次第	<p>○協議</p> <p>(1) 子どもの未来応援ワークショップについて</p> <p>(2) 鹿児島市子どもの未来応援条例（仮称）の検討について</p>		
主な内容等	<p>（○委員 ●事務局）</p> <p>(1) 子どもの未来応援ワークショップについて</p> <p>○報告書の活用方法は。</p> <p>●参加者や関係者の他、参加者の学校や教育委員会へ送付するが、その他の活用方法についても検討していく。</p> <p>○子ども達も生活に不安を感じている意見であるように思う。</p> <p>○参加する子ども達は意識が高い子どもたちなので、大人も含めた生活上の支障についても触れていて、しっかりした印象を持つ。逆に、子どもが子どもらしく遊べていない、過ごせていないことの裏返しではないのか。子どもの育ちが保障できていないことの現れでもあると思う。</p> <p>○参加した子どもたちからも「公園が遊びづらい」との意見があった。ボールを使うと怒られる。子ども達が過ごすことのできる居場所がなくなってきている。</p> <p>○今回のワークショップの子ども声は、大人に対する配慮があるのかもしれない。自分が子どもの頃は、もう少し大人に対する反発や対立心があったが、最近の子ども達は失敗ができない状況で、うまくやろうと空気を読んでいるように思う。</p> <p>○ルールは守らないといけないが、子どもが自己判断できる力を身に付けて欲しい。結局のところ、地域づくりをどうするかが重要で、一番難しい。</p> <p>○すでに、子ども達が社会的制約を受けている中で、子どもの社会参加を保障していくことは難しいように思う。</p> <p>○校則を緩くすると、今度は子どもに関する責任が全て家庭にいつてしまう。例えば、スマホの問題も、学校が特に禁止をしないと、全て家庭の自己責任になってくるため、家庭が学校に対応を求めてくることもある。校則といっても、実は色々な事とつながっている。また、ワークショップも、子どもたちが空気を読んだ意見かもしれないが、それでも子どもたちが考えてのことであり、嘘ではないと思う。本音の部分では遊びたい、大人と関わりたいのだと思う。</p> <p>○子どもの声を大人がどう受け止めるのかが大事。校則は小さな問題に見えて、実は色々な事とつながっていることも見えてきた。</p> <p>(2) 鹿児島市子どもの未来応援条例（仮称）の検討について（資料2-1）</p> <p>○大阪府摂津市の虐待事件で、ケースに携わっていた担当職員が一斉に変わっていたという報告書が出ていた。この条例が機会になるのであれば、行政内の専門職</p>		

員の配置が本当に必要だと思う。

- 専門職員の配置については、条例内容というより、条例制定後の施策で検討していく。
- 条例の中で行政の役割についても書かれてくると思う。どこまで具現化するかは別にしても、職員の研修など、職員についての規定も入れることができるのか。
- 努力規定については入れることができる。

(2) 鹿児島市子どもの未来応援条例（仮称）の検討について（資料2）

- 規範的に受け止められる恐れがある表現については修正の検討を。
- ワーク・ライフ・バランスについては、事業者だけでなく、行政職員も当てはまるのではないか。
- 子どもの意見表明ができる事を基本理念に盛り込んでも良いのでは。
- この条例を体現するような表現があっても良いのではないか。ワークショップで出てきたようなワードを使っては。
- 子どもの最善の利益の部分に「興味・関心」についての記載があるが、あえてもう一度出しても良いのではないか。子どもの興味・関心を知るためにも、子どもの声を聴くことが必要。
- 子どもたちと一緒に作っていく姿勢が見えても良いのではないか。諸課題に、子どもの声を受け止める場が少ないことを一番に入れても良いと思う。
- 川崎市のように、子ども会議の場を作っていくのか。
- 今後の施策で検討していく。
- 条例にどのように盛り込まれるかが大きいと考える。庁内意識調査と理念とのギャップをどう埋めていくのか。
- どこかが、子どもが主体となる表現になれば良いと思う。
- 条例を作る側が大人なので、主語が大人になっていると思う。自分も同世代の保護者として、高校生は学びの場を求めている。子どもの居場所を求めている。子どもの年齢は幼稚園・小学校・中学校・高校と幅広く、大人側も臨機応変に対応していく必要がある。コロナ禍で、遊んでいるだけで周囲の冷たい空気を感じる。今後、「だから、市はどうする」につながっていくと思う。対話も含めて、場を作っていくことが必要。もっと、取組を進めていっても良いのではないか。